

藤川洋子〔著〕

新訂増補 神経発達症と少年非行

——司法面接の実際

A5判並製・金剛出版

2025年11月刊

定価3,740円（税込）

評者＝上野千穂（京都市児童福祉センター診療所）



「家庭裁判所によろこそ」。そんな声が聞こえそうなこの本は、藤川洋子氏のナビゲーションにより家庭裁判所（以下、家裁）で繰り返される家庭内葛藤や少年の課題を忌憚なく、そしてあまねく紹介している良書である。

家裁は「家庭に光を、少年に愛を」を理念として1949年に産声をあげた裁判所機関で、家事事件（離婚、親権・監護権・親子交流等の争い）と少年事件（非行少年の保護処分等）を扱う。家裁にはもう一つの理念、家裁の5性格というものがあり（独立性・民主性・科学性・教育性・社会性）、心理職は主に科学性——少年や事件の背景を科学的にアセスメントする——を担う。

元家裁調査官である著者は心理職として鋭い科学性を発揮するのみならず、教育性（将来を見越した教育的アプローチ）、社会性（他機関と連携し社会的居場所を作る）、民主制（親しみをもって関わる）、そして独立性（家裁ならではの専門的アプローチ）という5性格全てを常に意識して、少年たちを導いてきたことが本書から伝わってくる。

さて、本書のタイトルは「神経発達症と少年非行」であるが、神経発達症だけでなくさまざまな背景をもつ子どもたちの臨床を行ううえで「どのようなアセスメントが必要か」「本当の支援とは何か」という「少年と向き合い、かつ寄り添う原点」も学べる。

まずアセスメントについて。家裁を訪れる家族も少年も複雑な家庭の出身が多い。そこで大切になるのがジェノグラムである。申立人や少年を囲む家庭から祖父母、親戚と遡り、家族の人となりや聴きとるなかで当事者の思いや支援が見えてくることが語られていて、児童相談所に勤める私は大いに共感した。また聴き取りの仕方によってアセスメントが変わってくるため、司法面接の手法や子どもの権利について配慮すること、そして「こういう生き立ちだから」「きっとこう思って犯行に及んだのだろう」と決めつけず、「わからないこ

とに謙虚になること」が語られている。著者の「早わかりせず、真実を見つめる」姿勢が「少年の非行や犯行の背景に発達特性が関係しているかもしれない」という大切な視点に結びついたのである。

次に本当の支援とは何か。著者は一貫して神経発達症の少年矯正には「反省ではなく環境調整」「学校や就労をやみくもによしとしない」ことが必要で、少年を追い込むことは支援にならないことをはっきり説いている。これは非行少年全体の支援にもつながる。

本書には、性非行への理解と対応、医療や支援センターとの連携の在りよう、子どもの問題行動は親をも深く傷つけていることから親への理解と支援も重要なこと、原因の追究よりも問題解決モデルが大切なこと等々、家裁で一人ひとりの少年と向き合い学ばれたことのエッセンスがたくさん詰まっている。詳細はぜひ本書を手にとってじっくり読んでいただきたい。

最後に。私は家裁で^{ひきこも}ひきこもで^{ごも}ごもに従事していたが、関わった人々の悲喜交々は生涯忘れない。本書を通じて「家庭とは何だろう」と奮闘する家裁の人々の努力が皆さまに少しでも伝われば嬉しい。